

10月1日FD講演会内容翻訳

(翻訳：中野 裕美子)

講師：マリー・アンチョードギー教授

ワシントン大学ジャクソン・スクール・オブ・インターナショナル・スタディーズ

題目：

「グローバル時代の教育——ワシントン大学ヘンリー・ジャクソン・スクール・オブ・インターナショナル・スタディーズでの教育体験から」

はじめに

このたびはお茶の水女子大学にお招きいただき、集中講義ではすばらしい経験をさせていただき、感謝いたします。以前に日本に住んでおりました時からお茶の水女子大学のことはいかがっておりました。それではまず、アメリカの大多数の大学ではどのように国際研究を教えているかについてお話します。

I. アメリカの国際研究教育の状況

ワシントン大学はアメリカで日本研究のできる数少ない場所です。アメリカ国内では日本研究ができる大学が数校あり、それにはカリフォルニア大学サンディエゴ校、ジョージワシントン大学、ジョンズホプキンス大学などがあります。しかし、一般的には国際研究は、学部ではなく、プログラムにとどまっています。

(1) 大学の学部は専門のディシプリンに基づいて分割されており、国際研究というディシプリンはありません。また、国際研究というプログラムがある学部も多くありません。これは、アメリカ人の第二次大戦後の世界観が変わったことに原因があります。つまり、戦後、地域研究は軽視されてきました。戦後はアメリカのやり方が世界のモデルだと考えてしまったからです。

(2) 国際研究の教育の状況は、世界は同質であるというアメリカ人の考え方を反映しています。つまり人間は政治、経済の分野では合理的であり、自分の利益を最大限にするという点は世界に共通しているという考え方があるのです。アメリカの民主主義、資本主義についての考え方は世界に共通した概念だとみなしているのです。

(3) このアプローチの問題点は、世界には多様な民主主義、資本主義社会があることを

認知しないことです。しかしたとえば私は、日本はコミュニタリアン資本主義をもっていると考えています。つまり日本の資本主義は、お金を儲けることだけが社会の唯一の目的となっていないところがアメリカの資本主義と異なっているのです。日本は資本主義ではありますが、雇用を確保し、社会の安定を守ることが求められています。不況下においてはアメリカ型資本主義に従えば、従業員を解雇することが当然の解決策なのですが、日本ではそうしません。

Ⅱ. ワシントン大学ジャクソン・スクールはどのような特徴があるのか。なぜワシントン大学で日本研究が行われているのか。

(1) 歴史

ワシントン大学は 140 年の歴史を持っていて、アメリカで最初に国際研究をはじめた大学です。ハーバート・ゴウエンという人が始めました。彼は日本と中国の専門家でした。そして我々は幸運にも多くの寄付金を得ることができました。たとえばフォード財団、カーネギー・メロン財団から、60 年代に多額の寄付を受けました。日本の方はご存じないかもしれませんが、70 年代初めに田中角栄は 10 のアメリカの大学に 100 万ドルを寄付し、そのために研究資金が得ることができました。その寄付は公立大学には救いで、我が校では日本に関する学術雑誌を発刊することになりました。私はその雑誌の編集をしています。歴史的に幸運であり、また日本の文部科学省にあたるアメリカの教育省が国際研究を奨励したので、財団から資金が得られたのです。

(2) 当校の考え方

ジャクソン・スクールでは語学を重視しています。私は『日本経済新聞』を日本語で読めます。文献も日本語で読みます。語学を学ぶことはその文化を学ぶことなのです。

(3) 理論主導型ではなく問題主導型

我々は、理論研究より、問題が起こったらそれはなぜかという問いかけからスタートします。政治学、経済学では理論をまず作ってからそれを確かめようとします。我々は問題提起をまずします。たとえば私が最近問題としていたのは、「日本の資本主義の性質とは何か」という問いです。「日本の資本主義の目的は何か」「なぜ日本のハイテク企業が 30 年間大変成功してきたのか」「どうして今、うまくいかなくなったのか」。このように、最初に理論をたてて、それを日本にあてはめようとするのではなく、問いを発して、その答えをもとめようとする方法です。もちろん理論を無視するというわけではありませんが、あくまでも実証的な研究方法をとります。

(4) 成果

その結果、我々のスクールは学際的になり、地域の専門家であると同時に歴史学者、文化人類学者、政治学者、経済学者、経営学者でもあるといった人もいます。我々はどこかの学部に属するというわけではありません。

(5) 地域研究

アメリカでは世界は皆同じと考えて地域研究を疎んじる傾向がありました。地域研究に対する関心が薄くなるにつれ、この20年間に多くの大学で国際研究の学部は廃止されてきました。ジャクソン・スクールでも、文化人類学部、経済学部、歴史学部、社会学部などに吸収すべきだという議論がありました。幸い豊富な基金があったので生き延びることができました。

皮肉なことですが2001年9月11日の同時多発テロはジャクソン・スクールにとっては追い風となりました。この事件以来、地域研究は重要だという世論が国内で起こったからです。ワシントン大学内の我がスクールの知名度は上がりました。

(6) 合理主義

合理的な選択をだれもがするという考え方は政治学や他の社会科学に浸透しました。15年から20年前は合理的選択の理論が社会科学部門を席卷していました。こうした社会科学の考え方は政治学でも一般的で、世界の人はみな合理的な選択をすると思われていたので、地域研究を避ける傾向に結びついたので。そのため、地域研究をしたい学生を退ける結果となりました。

そこでジャクソン・スクールではPh.Dのプログラムを作ろうとしました。それまではこのプログラムはなかったのですが、日本の政治をもっと学びたいという学生が多かったのです。しかし政治学部はこれを歓迎したわけではありません。我々は合理的選択については否定するものではありませんが、合理的といっても様々な種類の合理性があります。合理的でないといわれている宗教について言えば、宗教は政治的に人々の行動に大きな影響を与えているのではないのでしょうか。イラク、アフガニスタンを見ればおわかりでしょう。文化、歴史が政治に影響を与えているのに、アメリカ人はそれらを非合理的であるとして退けてしまうのです。

たとえば日本経済が不況になるとアメリカ人は「日本はどうしたのか。」と私に聞きます。「なぜ不況なのに日本人は従業員を解雇しないのか。もっと合理的にしなければならない。日本の終身雇用制は自殺行為ではないか」と言います。私は日本の資本主義は社会全体のことを意識しているところがアメリカと異なるのだ、と答えました。日本の資本主義は不安定な社会を避けようとしているのだと説明します。

III. どのように教えるか

(1) 帰納的アプローチ

我々は、理論は教えますが、実証データに焦点を置き、帰納的にアプローチします。つまり、何が起きているかを学生にまず説明し、そこから帰納的に考察するのです。たとえばアメリカ民主主義では政治家が力を持っているが、日本では官僚が力を持っているのだと説明します。そして学生にアメリカの理論を用いて学生に日本のことを説明します。学生に対して日本を見るときのような様々な視点を提示するわけです。韓国、台湾についても説明します。経済学的、政策学的にも考察します。アメリカだけではなく、中国の地方のレベルに見られる日本の産業政策も私は研究しています。

(2) 比較

我々は、特定の現象に対して複数の異なった説明があることを学生に提示します。戦後日本の急激な発展に影響を与えた文化、市場の力、国家の政策、国際的に重要な変数を提示します。日本の政治システムは複雑であることを理解させます。また、他の国との比較をします。たとえば韓国は日本の経済モデルを取り入れていることや、日本の政治、社会、法律の制度はアメリカではなくむしろヨーロッパに近いことを知らせます。アメリカこそが特殊であり、日本や韓国が特殊ではないことを繰り返し言います。

IV. 日本人学生に対する印象

(1) お茶の水女子大の学生

大変すぐれた学生です。これはお世辞ではありません。毎日 4 時間半の英語の集中講義に出てまじめに参加し、大変印象的な学生たちでした。プレゼンテーションは 6 分ということでしたが英語で 10 分も話す学生もいました。この大学の先生方は優秀な学生を教えていることを誇りに思ってください。すべての学生に A をあげたいと思います。

(2) ジャクソン・スクールの日本人学生

ジャクソン・スクールには早稲田大学、立命館大学、青山学院大学、慶応大学の学生が 1 年のコースにきています。早稲田大学の学生が特に多いです。彼らは日本について知っているので学びやすいことから、このコースをとっています。まじめな学生がほとんどですが、少しですが単にアメリカに遊びにきて、授業にほとんど出てこない学生もいます。

(3) 日本人学生の規範

日本人は発言しないことをよしとする規範があるので、質問しないで静かにしていることが多いようです。日本人学生にとって、教授は絶対的な存在なので、反対意見を出したり質問をしてはいけないと思っています。また、日本の教育が暗記中心なので、分析することや英語を話すことに問題が生じていると思います。

V. 日米の学生に共通している点——教員が直面していること

(1) モチベーション

モチベーションに関しては日米共通の問題があります。たとえば新聞を読まないことです。ニュースは他の手段で得ています。両国は経済的に豊かであるので、学ぶためのモチベーションはかつてのようには高くはありません。

(2) 熱心さ

携帯電話、ビデオゲームなどによって学習への集中力がおちています。アメリカのクラスでは学生の不注意から授業中に携帯電話が鳴ることがあります。今回のお茶の水女子大学での集中講義ではありませんでしたが、最近アメリカの学生の集中力が落ちていることは長年教えていて感じています。また公立校では学生が経済的に豊かでないので、長い時間仕事をしながら学校に来ています。このため、学生が忙しくなっています。

VI. 結論——グローバル化の時代におけるすばらしい教育の鍵となるもの

(1) 語学力

まず、国際問題を扱うなら外国語は絶対に必要です。自分の経験から、日本語を学ぶことは日本の文化を学ぶことだとわかりました。

(2) 海外渡航体験

外国に出かけることが必要です。外国から自国を見ることは重要です。しかし経済的に難しいことがあります。特に公立大学では困難なことです。

(3) 国内外のインターンシップ

インターンシップは有効です。企業に入り無報酬で働くことができます。私の大学は日本の政治家に関係があって、毎年学生をこの政治家のところで働かせてもらっています。

(4) 海外で働くこと

日本の政府が行っている日本の中学・高校生で英語を教える JET プログラムは有効です。私の学生の 80%はこの JET プログラムで日本に来て、働いた経験があります。どんなチャンスも見逃さないようにしなさいということにしています。

(5) 地球市民

どの国でも地球市民が求められています。日本にいる外国人学生と交流させることも有効です。

ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

アンチョードギー先生：日本でも地域研究を教えることで同様の問題はありますか。

質問者A：

同様な問題は日本にもあります。ディシプリンと地域研究の間の大きなギャップがあります。社会科学の知識も必要です。我々はアジアの国家間の比較をしようとしています。その理由はアメリカと比較すると、東洋対西洋の比較になってしまうからです。

私の知りたいことは、第一に、確立したディシプリンと地域研究のギャップを研究の中でどう扱えばよいかという点です。第二点は、地域研究を専攻した学生の進路についてです。ジャクソン・スクールで地域研究を学んだ学生は、卒業後、どのような進路にすすんでいますか。進路を学生に提示するのは我々教員の義務であると考えているのですが。

アンチョードギー先生：

はじめの質問にお答えします。理論は使いますが、実際に何が起きているのかに注目します。もちろん社会科学の知識も学生たちに要求しています。しかしこれはなかなか難しい問題です。

二つ目のご質問は興味深い内容です。アメリカで就職にすぐに結びつく学問は経営学や経済学、生物学、工学などです。日本研究、中東研究を学部で学ぶか、大学院で学ぶかはありますが、その学位は仕事を得ることにすぐに役に立つものではありません。日本研究をしている学生は日本に何らかの関わりがある人が多いです。たとえば両親の片方が日本人であるとか、日系アメリカ人であるとか、高校で日本語を勉強したことがあるような学生です。そして日本研究をしている学生の多くは、日本のアニメに興味を持っています。20年前は日本に関心を持つのは経済発展についてでした、また当時は日本研究の学位はビジネスの世界でも有効でした。現在は学部生にとってはあまり有効でなくなったので、大学院に進む人が多いです。日本企業に就職する道もあります。日本語ができればマイクロソフトなどのアメリカ企業でも働けますし、任天堂はシアトルにもあります。またアマゾンに就職した学生がいて、日本にアマゾンを作って成功しています。

多くの学生は主専攻と副専攻を持っています。たとえば経済学を主専攻にし、日本研究を副専攻にしたり、反対に日本研究を主専攻にし、経済学を副専攻にしたりしています。

このようなダブル・メジャーは一般的になってきています。これは就職を意識してのことです。

日本研究の修士号は就職にはすぐに結びつきません。多くの大学院生は卒業後外国に行きます。日本に行って日本で仕事を見つけるか、アメリカの商務省、CIA にも就職しています。我が校の日本研究の学位は就職には有利というわけではないですが、それは歴史や、文学を専攻した学生も同様だと思います。

質問者 B :

先の質問と重なりますが、既存のディシプリンと地域研究のバランスの問題をうかがいたいと思います。先生はどのようにバランスをとるように学生に指導されますか。その中で社会科学の学問に弱い学生に対してフラストレーションを感じませんか。

アンチョードギー先生 :

他の学問のコースをとるように勧めます。特定の地域に関する知識と社会学、経済学、歴史学などコースの両方をとるようにいいます。私は地域研究の学生に利点と不利な点をはっきり説明します。私のクラスは多くは社会科学の学生ですが、生物学の学生もいますよ。ところでお茶の水女子大には外国人留学生はどのくらいいますか。

質問者 A :

200 人くらいです。多くは大学院生で、中国や韓国から来ています。西洋からの学生は少ないです。ところで貴校で日本研究をするクラスの学生数はどのくらいですか。

アンチョードギー先生 :

学部では 30 から 40 人です。シアトルでは高校でも日本語を学べます。スペイン語につぐ人気のある外国語は日本語です。20 年前の関心事は経済問題でしたが、今日ではポストモダンな日本にも関心をもたれています。ハーバードやイェールでは日本研究の学生数は非常に少なく、今は中国やインドに関心が集まっています。私にとって、西部の大学で教えられることは幸運なことです。20 年前にボストンからシアトルにやってきた私は、シアトルでは美容師でさえ日本の政治のニュースを知っていたことに驚きました。西部と東部では日本に関する関心はかなり違います。ハーバードの人たちはヨーロッパの方に 관심이向いています。

質問者 B :

日本では自分の意見を言わないことや、教師を尊敬することがいいことだとされているとおっしゃいました。これはよくないことなのではないでしょうか。変えるべきならどのように変えるべきですか。

アンチョードギー先生：

日本的な教育法とアメリカ的な教育法のどちらがいいかは断定できませんが、お茶の水女子大学の学生さんには、講義中に私の意見と食い違っても自分の意見を述べるようにしていましたら、学生もそうになりました。教師の言うことをそのまま受け入れるより、自分で考えることが必要だと思います。他方、アメリカでは反対に暗記が必要だといわれるようになっています。また外国人と交流し、よい関係をもつことが大事だと思います。

質問者A：

主専攻と副専攻をとることについてはいかがですか。不利益があるのではないですか。またリベラル・アーツ大学とはどのような違いがあるのですか。

アンチョードギー先生：

私のところでは経済学を主専攻として学んでいる学生が多いです。日本に対しては個人的な関心を持っている人が多いようです。たとえば、経済学を主専攻にすると時間はかかります。しかし主専攻をとり、さらに副専攻として地域研究を学ぶことには利点がありません。

私の大学のようなリサーチ・カレッジでは学生の選択肢が多く、様々な科目があります。しかし私の娘が通っているような小さい単科大学では 8 コースしかありません。科目の選択肢が少ないということです。ただし小さい単科大学では教員は研究をしなくてよいので、学生に教える時間があります。学生の評価も頻繁にできます。大きい大学では 1 人ずつのケアはできないので、どちらにも利点と欠点があります。

質問者C：

私はタイからの留学生ですが、あなたのクラスには何人の外国人学生がいるのですか。

アンチョードギー先生：

ほんとうのところ、だれが外国人なのか日系アメリカ人なのかわからないのです。学部生の 70%はアジア系の学生です。タイやベトナム、中国の学生もいます。彼らは日本を自分たちのモデルとしてとらえて関心をもっているのです。20年前は 30%の学生がアジア系でした。現在はアメリカの大学全体でもアジア系が最も多いのです。他のアメリカの大学でも同じことです。『ニューヨーク・タイムズ』はアジア系学生の多さに問題があるように書いていたので、私は「それは人種差別なのではないか」と抗議の手紙を送りました。他の学部でも半数はアジア系の学生で占められています。

質問者C：

アメリカでの日本に対するイメージはどうか。

アンチョードギー先生：

日本に行っていない学生は漫画がイメージにあるようです。しかし多くの学生は日本に行ったことがあります。20年前の日本のイメージは茶道、生け花、芸者でしたが、今は映画やファッションに関心が向いています。私は授業で日本の古い映画や新しい映画を見せています。

(終わり)



お茶の水女子大学
Ochanomizu University